

II. 学部教育教材「博物館学芸員の仕事（考古編）」の制作 —映像表現の教材性追求の過程を中心に—

福井 康雄

1. はじめに

ビデオパッケージにおける学部教育教材の研究開発は、平成4年度に企画の検討が行われ、民俗編から着手する方針が決定した。そして、平成5年度に、有形民俗資料『仕事着』（第1部「調査と収集」・第2部「整理と保管」）を、また、平成6年度に、無形民俗資料『古代子供土俵入り』（第1部「調査と記録」・第2部「整理と保管」・第3部「民俗芸能の展示と公開」）及び「有形民俗資料の展示」の計6本のシリーズを完成させた。本稿で取り上げる考古学編は、民俗編に続く「博物館学芸員の仕事」の新たな1シリーズとして企画され、制作されたものである。

本シリーズの、全体構想の検討段階から議論に上っていたことだが、一口に、「博物館学芸員の仕事」といっても、それは、自然科学、考古学、文化人類学、民俗学、美術工芸等…といった多彩な分野に亘っており、ある一つの系統の博物館学芸員の仕事を教材化しただけで、学芸員の多彩な仕事の全てをカバーしたことになることはいうまでもない。第一作のシリーズは、多分に試作品的な意味もあり、①他の分野に比べて、仕事の体系化が未調整であり、共通教材が制作された事例が少ないこと…②取り上げる素材が、映像教材に適していること…③プロジェクトチームの研究者の中に、その分野の専門家がいて、内容をよく把握していること…などの理由から、研究担当スタッフにとっては比較的身近な素材でもある、民俗学系博物館学芸員の仕事が教材制作の対象となった。では、民俗編に続く教材としては、どの分野の学芸員の仕事を上げるべきなのだろうか？

勿論、理想的には、全ての分野の教材を一挙に整えることが望まれるところであろう。しかし、現在の研究体制からすると、人的にも採算的にも、初年度に、1つの分野の教材を開発し、2年度目に、その評価研究を行うといったペースが精一杯である。では、優先順位を付けるとすれば、民俗編の次には、どの分野から着手するのが合理的なのだろうか？ 教材研究室では、左のようなことを前提に検討を進め、結論として、当面、出来るだけ広範囲な利用の見込める教材を優先して開発することとし、調査の結果も踏まえて、当該分野の博物館数が最も多く、したがって、博物館学芸員への教育の必要度も比較的高いと考えられる、考古学系学芸員に向けた教材の開発を行うこととしたものである。

博物館学芸員の仕事は、どの分野のものであれ、基本的には、「資料収集」→「整理保管」→「展示」といった大きな流れに沿っており、その各段階に、調査研究といった活動が絡まりながら進められていく。したがって、題材が“民俗学”から“考古学”に変わったとしても、この基本的な枠組みにあまり変わりはない。しかし、分野が異なれば、当然、その教材としてのねらいも、また、取材の内容も大きく相違してくる。特に、このシリーズが研究開発という文脈で作成されることを鑑みると、教材としての内容構成も、また、制作方法自体も、単に、前シ

II. 学部教育教材「博物館学芸員の仕事（考古編）」の制作

リーズのルーチンを踏襲するのではなく、前作の経験を踏まえたうえで、また、新たな着想や手法のもとに展開されるべきであろう。では、この新しい考古学系の博物館学芸員の仕事シリーズでは、どこに、開発の焦点を絞って教材制作を進めるべきなのだろうか？

前作の民俗学系学芸員のシリーズは、その仕事の内容が体系化しにくく、学部での教授の方法も異なっているところから、こうした条件下では、どのような共通教材の作成が可能か？…といったことが、主なモチーフの一つになっていた。そして、評価調査の結果（放送教育開発センター研究報告書第88号『ビデオ教材「学芸員の仕事」の評価調査』）にも示されているように、体系化の難しい素材を、共通教材化するという初期の目的は、一応、達成することが出来た。しかし、この度取り上げる考古学系学芸員のシリーズは、民俗学の場合と反対に、仕事の内容も比較的体系化されており、学部での授業も、手法はともかく、その内容には、あまり大きな差はないといえる。したがって、制作の焦点を絞るとすれば、前シリーズのように、共通教材として成立するかどうかを問うよりも、むしろ、考古学系の博物館学芸員に特化した共通教材としては、どのような映像の姿・形が望ましいのかといった、もう一步、映像の内容や表現技法に突っ込んだ、具体的なテーマの設定が必要になってくるものと考ええる。同じ映像教材であっても、扱うジャンルにより、また、対象者により、その映像表現の方法は千差万別である。そしてそれは、この度の考古学系の博物館学芸員のシリーズの場合にも、例外ではない。とすれば、本シリーズで第一に試みられるべきなのは、どのような映像表現が、考古学系博物館学芸員のための教材として最も適切なのかという、映像の教材性に関わる研究開発ではないだろうか？

“映像表現の教材性追求の過程を中心に”というサブタイトルを付して、以下に、本シリーズの制作過程について記す所以である。

2. 企画の立案

（プロジェクトチームの編成）

研究開発は、教材研究室の研究員が主体となって進められるが、実際の作業は、企画の立案—取材—仕上げの各段階で、センター外の多くの専門分野の研究者の協力を仰ぎながら進められることになる。したがって、作業を開始するに当たっては、当該分野の研究協力者を含めたプロジェクトチームを組織することとし、まず、チームを取りまとめる座長を、国立歴史民俗博物館の白石太一郎教授にお願いした。そして、白石教授の示唆を得ながら、教材の内容を充実させ、出来るだけ利用度の高いものとするため、センター外の研究協力者として、①考古学全体の立場…②大学における博物館学の担当者の立場…③博物館の研究者の立場…④保存科学ないし考古学と自然科学の提携の立場…といった幅広い分野の方々をお招きし、そこに、センター内の研究担当者を加えてプロジェクトチームを編成した。

編成されたプロジェクトチームのうち、センター外から参加して戴いた、研究協力者のメンバー構成は、以下の通りである。

白石太一郎 国立歴史民俗博物館考古研究部教授・研究部長（古墳時代）

木下 政史 東京学芸大学文化財学科教授・考古学（歴史時代）

亀井 明德 専修大学文学部教授・考古学（貿易陶磁）

早川 智明 埼玉県立博物館館長・考古学（石器時代）

安藤 孝一 東京国立博物館学芸部考古課長・考古学（歴史時代）

永嶋 正春 国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授・保存科学

教材の研究開発は、上記のプロジェクトチームを“核”として発足したが、作業が、さらに具体的となり、チームや撮影場所が定まった段階では、取材先の担当者等に、適宜、研究協力者としてチームに参加して戴き、現場の実情に即したアドバイスを得ながら制作を進めることとした。

（全体構想の検討）

第1回研究会 日時：平成7年6月12日（月）13：30～16：30

場所：放送教育開発センター研究資料棟8回教材開発室

プロジェクトチーム編成の後、第1回目の研究会を開催した。そして、まず、考古学系の学芸員を対象とする教材を開発するとすれば、どのような内容に焦点を絞り、それを教材化するには、どのような形態や表現方法が適切か？…といった、教材の全体像についての検討を行った。

プロジェクトチームの構成メンバー表にも見られるように、同じ考古学分野の研究者であっても、その専門とする研究項目は、それぞれに異なる。従って、具体的な教材の検討に先立って、まず、博物館の研究者、大学で博物館学を教える研究者、考古学と自然科学の提携をテーマとする研究者…といった、さまざまな立場から、考古学系の博物館学芸員の現状についての各人各様の情報を出し合いながら、教材制作に当たっての質問点を整理してみることにした。その内容について、項目別に記すと、凡そ以下の通りである。

①考古学系学芸員の仕事の特性について

考古学系学芸員の仕事も、基本的な部分は、他の分野と大きく変わらないが、考古学系ならではの特性を上げれば、第一に、発掘調査ということになる。但し、実際に発掘調査を行う博物館は少なくなっており、現状では、発掘調査は、埋蔵文化センターのような調査機関が行うことが多くなっている。しかし、発掘調査は、考古学系博物館の調査研究や展示内容と深く結びついており、考古学系の学芸員の仕事の学習には、欠かすことの出来ない項目である。

②大学における考古学系学芸員コースの指導について

学芸員コースの、特に、テクニックについての指導は、一部の大学を除いて、一般的に施設や教材が不足しているところから、その全てをカバーするのは、なかなか困難な状況である。したがって、テクニックそのものよりも、その背後にある、さまざま遺物から情報を引き出すセンスや方法論などを学習させることが多くなっている。本来は、このような“物を見る目を養う教育”と“テクニックの教育”とが表裏一体となって進められることが理想的であり、実習のテクニックのようすなどもビジュアル化する、今回のような教材が制作されるとすれば、各方面で利用されることが期待される。

③考古学系博物館での実習について

II. 学部教育教材「博物館学芸員の仕事（考古編）」の制作

埼玉県の場合、県立博物館 6 館の代表者会議で、実習生の受け入れ人数や専門分野の調整などを行っている。受け入れについては、大きく二つの方法に分けられる。その一つは、《きちんとカリキュラムを作って、概論的な説明を加えながら行う場合》であり、また、二つ目は、《受け入れ時点で、館の人手が足りない部分などを手伝ってもらう場合》であるが、このような博物館での実習の際にも、適当な映像教材があれば、オリエンテーションの場合などに役立つことになるであろう。

考古学系博物館をめぐる諸情報を、凡そ、以上のように整理したところで、次に、こうした現状を踏まえて、今回の教材を、どのような形式（内容、時間…等）にまとめるべきかという検討に入った。そして、議論を重ねた結果、まず、考古学系学芸員の仕事を以下の三段階に分けることとした。

第一段階……資料収集、復元、整理、保存処理

第二段階……資料の分類、調査研究、公開、保存処理

第三段階……展示、保存処理

上を見ても分かるように、例えば、保存処理という作業は、三つの段階のいずれにも関わりをもっている。また、文字で表わされていないが、調査研究といった作業も、第二段階だけではなく、他の作業の全ての段階に深く関連した項目である。したがって、三段階の作業を、何本かの独立したビデオ教材としてまとめていくためには、こうした重複した部分を、それぞれの教材に、どのように絡み合わせて構成していくかも、一つのポイントとなる。こうしたことも考慮に入れ、検討を進めながら、三段階の作業を、まず、教材として最低限必要と考えられる五つの要素に分けた。そして、さらにそこに、相互に密接に関連した全体の流れを展望出来る総論編と、博物館と地域社会との連携の在り方を描く社会教育編を加えて、以下のような、教材の全体構成の第一次素案をまとめた。

1. 総論編（考古学系博物館の種類とその機能）
2. 発掘調査編（発掘調査を中心とした調査）
3. 資料収集・復元・整理・保存処理編（収蔵庫に入れるまでの基礎的資料の処理）
4. 資料の分類・調査研究・公開・保存処理編（資料を整理し保管するまで）
5. 展示・保存処理編 A（常設展示のあり方）
6. 展示・保存処理編 B（調査研究に基づいて企画展示が出来上がるまで）
7. 社会教育・生涯教育編（実験考古学などを取り入れた教育プログラム）

主な教材の内容は、上のように決まったが、具体的な教材としてまとめていくためには、教材の時間や表現スタイルといった要素などの検討を行うことも必要となる。しかし、これについては、まだ、教材の内容も絞られていないので、この研究会の後に予定されている各地の博物館の予備調査後、教材の内容が最終的に決定した時点での検討事項とすることとした。

尚、検討作業の中で、プロジェクトメンバーから、企画の内容に沿った、予備調査の候補として上げられた博物館は、以下の通りである。

○発掘調査編……さきたま資料館、福岡市立博物館、徳島県立博物館

○資料収集・復元・整理・保存処理編……埼玉県立博物館、岩手県立博物館、北海道開拓記念館、福岡市埋蔵文化センター

○資料の分類・調査研究・公開・保存処理編……横浜市立歴史博物館、榎原考古歴史博物館、さきたま資料館、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館

○社会教育・生涯教育編……房総風土記の丘、八戸市立博物館分館、千葉市立加曾利貝塚博物館、笠懸野岩宿文化資料館

(平成7年度一予備調査)

第一回予備調査	日時：平成7年7月13日（木） 場所：笠懸野 岩宿文化資料館
第二回予備調査	日時：平成7年7月14日（金） 場所：埼玉県立さきたま資料館
第三回予備調査	日時：平成7年7月14日（土） 場所：埼玉県立博物館

第一回研究会の後、直ちに、上記の三カ所で予備調査を行った。この調査では、博物館の仕事の現状を把握し、今後の企画やシナリオ制作の参考にするとともに、実際の撮影が可能かどうか、博物館判の受け入れ態勢やスケジュール等についても、ある程度の見通しを得ることが、その目的である。

調査の結果、以下のような諸点が明らかとなった。

【岩宿文化資料館】

岩宿遺跡に隣接して立つ、この資料館では、旧石器時代に関する資料を展示するとともに、岩宿大学や岩宿フォーラム、体験学習教室…等、「友の会」を中心とした社会教育活動も活発に行われている。

【さきたま資料館】

野外博物館としての性格をもつ、さきたま古墳群の一角を占める、この資料館では、発掘遺物の展示活動を行うとともに、学芸員の手によって、さきたま古墳群の発掘事業が継続中であり、現在も、將軍塚古墳の発掘作業が進行中である。また、夏休みを利用して、〈埴輪の野焼き〉や〈勾玉作り〉のような体験学習も行われている。

【埼玉県立博物館】

埼玉県を代表する歴史系総合博物館である、この博物館では、企画展示事業にも力を入れており、平成7年度も、10月24日（火）からの開催に向けて、「特別展 古代東国の渡来文化」の準備が進行中である。

…上のような調査の結果、調査に当たったセンター側のプロジェクトメンバーでは、本年度の実行可能性や、制作に当てられる費用といった側面も勘案しながら、企画の全体構成の第二次素案を制作し、第二回の研究会に提出することとした。

II. 学部教育教材「博物館学芸員の仕事（考古編）」の制作

(企画原案の検討)

第二回研究会	日時：平成7年7月17日（火）
	場所：放送大学学園東京連絡所会議室

センター側から提出した教材の第二次素案の概要は以下の通りである。

1. 発掘調査
2. 収集資料の整理・保存
3. 資料の科学的分析研究
4. 常設展示
5. 企画展示
6. 考古学における体験学習
7. 考古学系博物館学芸員の日常

研究会では、上記に基づいて、凡そ、以下のような諸点を中心に検討を行った。

①内容の重複について

全体で7本で構成される教材のうち、相互に内容が重複するものが少なくない。例えば、1.と2.については、いずれの場合も、整理・保存の作業は不可欠な要素であるし、また、2.と3.についても、科学的分析研究は、保存処理とも相互に深く関連しているので、切り離せない部分が多い。教材を利用のし易い形にするためには、出来るだけ内容を絞り、目的を明確にすることだが、こうした点を踏まえて、7本をいかに内容の重複しない、それぞれに独立性を保った教材としていくか？

②上記以外の博物館学芸員の仕事について

全体で7本の構成としたが、広範囲に亙る考古学系学芸員の仕事からすれば、まだ、描き足りない部分も少なくはない。なにもかも詰め込んだ、網羅的な教材となることは避けなければならないが、上記の構成案から漏れていて、尚且つ、外せないような重要な内容をもつ素材については、どのように扱っていくか？

②調査研究の描き方について

この度の教材を、単なる技術紹介ビデオではなく、その技術を、絶えず背後で支えている調査研究の部分が浮かび上がるようなものにしたい—というのは、研究会の開始当初からの、プロジェクトの課題であった。しかし、技術的な仕事と異なって、調査研究といった作業は、きわめて映像化しにくい素材であることも事実である。上のような項目の中で、調査研究といった側面を、どのような形で映像化していったらよいか？

…上記の検討課題からも分かるように、考古学系学芸員の仕事の全てをカバーしようとするれば、7本構成のシリーズでも描き足りない部分が出てきてしまうのは、止むを得ないところであろう。しかし、この度の教材の制作目的が、これから学芸員の仕事を学んでいく学生を主な対象者としたものであり、さらに、開発の成果を基とした教材研究への展開をも目指したものであることを考えると、初期段階の教材として、7本のシリーズの内容は、ほぼ、過不足のない妥当なものであらうと認められた。また、整理・保存や調査研究などの内容の重複について

も、一つの項目の一連の流れを描くためには、避けられない部分であり、取材対象を違えて、主題や内容を十分に焦点化して描いていけば、それぞれに独立した教材として成立するものと考えられた。調査研究の描き方については、確かに難しい課題であるが、むしろこれを、今回の教材制作の挑戦課題の一つととらえて、今後のシナリオ化の作業等の中へ反映させていこうということとなった。また、教材の形式についても検討が行われ、学部の90分という授業形態を考えると、20～30分のビデオが適当なところであろうとされたが、尚、今後の課題として、特に、技術習得的な内容の教材については、将来のCD-ROM化に備えて、内容をより素材化した画像も、予備的に収録しておくべきではないかということとなった。

以上のように、企画の原案が定まったところで、平成7年度分として、予備調査の段階で、既に、収録の見通しのついていた『1.発掘調査(さきたま資料館)』、『2.収集資料の整理・供存(埼玉県立博物館)』、『3.企画展示(埼玉県立博物館)』の3本のシナリオ制作と撮影準備にとりかかった。

(企画構成案の最終決定)

平成7年度の初頭に行われた研究会で、7本の企画原案が決定し、とりあえず、その中の3本の制作が進められた。しかし、未完成の4本分も含めた、企画構成案の最終的な形については、平成8年度に入り、平成7年度分の3本の教材の完成を見て後、その成果も踏まえて、以下のようなスケジュールで予備調査を行い、センター側の研究スタッフがまとめた試案を、研究会で検討して決定した。

(平成8年度—予備調査)

第一回予備調査	日時：平成8年1月25日(木)
	場所：奈良国立文化財研究所
第二回予備調査	日時：平成8年1月26日(金)
	場所：京都大学文学部博物館
第三回予備調査	日時：平成8年6月20日(木)
	場所：長野県立歴史館
第三回予備調査	日時：平成8年7月18日(金)
	場所：千葉市立加曾利貝塚博物館
第一回研今会	日時：平成8年7月31日(水)
	場所：放送教育開発センター研究図書資料棟7Fカンファレンス室

平成7年度案と8年度案との主な相違点は、以下の通りである。

- ①7本目に設定してあった『考古学系博物館学芸員の日常』を、他の教材の中でも窺い知ることが出来るという観点から外し、シリーズの全体を6作品で構成することとしたこと。
- ②博物館の種類とその機能を紹介する予定であった『常設展示』を、出来るだけ一つの事例に絞って、突っ込んで描いた方が、内容が深まり、まとまりのある教材になり易いという平成

II. 学部教育教材「博物館学芸員の仕事（考古編）」の制作

7年度の実験から、取材対象を、長野県立歴史館一つに絞って制作することとしたこと。

- ③『体験学習』についても、平成7年度に予備調査をした岩宿文化資料館の活動なども取り入れて、多面的に描く予定であったが、上と同様の視点から、加曾利貝塚一館の事例に絞って、深く掘り下げて教材化することとしたこと。
- ④『保存科学』の場合も、一般の博物館の科学的処理や保存処理も加える予定であったところを、現在、自然科学的手法の最先端の技術をもつ、奈良国立文化財研究所の事例一点に絞ってまとめることとしたこと。

…上のように、平成7年度の実験経験に基づいて、出来るだけテーマに沿って、題材を一つの対象に絞り、まとまりのある、目的の明確な教材にしていくという“ねらい”から、企画の原案の整理を進め、企画構成案の全体像は、最終的には、以下のような形に落ち着くこととなった。

(企画構成・最終案)

タイトル	完成年度	収録場所
①『発掘調査』 (32分)	平成7年度	埼玉県立さきたま資料館
②『資料の整理と保管』 (20分)	〃	埼玉県立博物館
③『企画展示』 (30分)	〃	埼玉県立博物館
④『常設展示』 (27分)	平成8年度	長野県立歴史館
⑤『体験学習』 (30分)	〃	千葉市立加曾利貝塚博物館
⑥『資料の分析と保存処理』 (30分)	〃	奈良国立文化財研究所

3. シナリオの作成

(表現方法について)

一口に、シナリオというが、教材の表現方法は、実に、多種多様であり、その基礎となるシナリオのスタイルも、決して一様ではない。そして、それは、今回のような、教材制作の場合でも例外ではない。

この度の教材は、20～30分という時間枠の中で、一つの題材を、起承転結をもって描き出す、いわゆるストーリー型の教材を目指すものであるが、従来、最も多く取り上げられてきた、この種のスタイルのビデオでも、その表現方法ということになれば、実に、多種多様な展開が考えられる。

一つには、放送教育番組などで多く用いられている、講師を中心に映像を構成していく、講義型ともいべきスタイルが上げられるだろう。勿論、画面にナレーションを付して構成される、きわめてオーソドックスな解説型の手法なども、多く取り入れられているところである。解説をきわめて少なくして、映像そのものに多くを語らしめようとするドキュメンタリー方式…劇構成で主題の展開を図るドラマ型式…解説型やドキュメンタリー方式の一部にドラマを取

り入れた折衷方式…等々、その表現方法は無数といってよく、従って、それに相応したシナリオのスタイルもその数に限りはない。

では、この度の教材のシリーズの、シナリオの制作に当たっては、どのような観点から臨むべきなのだろうか？

検討の結果、まず、6本の教材の表現スタイルを、決して、一つの方法で統一はしない—という基本的なスタンスを設定することとした。

6本の企画構成案は、一見、考古学系博物館という共通の主題で結ばれてはいるが、その内容には、野外での発掘があり、屋内での展示があり、また、自然科学的な方法での遺物分析や保存処理がありというように、実に、バラエティーに富んでいる。従って、全体を一つの手法で統一するよりは、その教材に最もふさわしい手法を、適材適所で採用していくことこそが、その素材を最も生かすことになるものと考えられる。また、この教材制作が、成果の評価調査を踏まえた、研究開発という側面をもったプロジェクトだということを考え合わせれば、ある一つの、比較的無難で、ルーティンな手法に固執するよりは、出来るだけ多くの手法にチャレンジし、その効果を試していくことが、配発開発の目的に、より適ったものといえるだろう。

従って、シナリオの作成に当たっては、上のような基本的スタンスに立って、各編毎に、収録現場への事前調査を何回か繰り返し、その調査結果を踏まえた上で、その主題に最もふさわしい表現スタイルを採用し、作業を進めるという方法をとった。

以下に記すのは、上のような方法で完成させた、6本のシナリオの作成のポイントを、主に、本稿の主題である“映像表現の教材性追求”といったところに焦点を絞りながらまとめたものである。

(完成シナリオのポイント)

(1) 『発掘調査』

○主題

ある発掘調査が計画され、目的に沿って実行され、研究成果としてまとめられていくまでの過程を、実例をもとに、出来るだけ具体的に描き、博物館学芸員の発掘調査が、考古学研究の中で果たす意味合いを浮かび上がらせる。

○シナリオ案・骨子

- ①プロローグ—さきたま古墳群の概要—
- ②さきたま資料館の役割
- ③將軍山古墳の発掘〈A〉—その目的と実施計画—
- ④將軍山古墳の発掘〈B〉—作業の実際—
- ⑤將軍山古墳の発掘〈C〉—その成果—
- ⑥エピローグ—発掘調査の意義—

II. 学部教育教材「博物館学芸員の仕事（考古編）」の制作

企画の検討段階でも確認されたように、この度の教材は、技術の方法論だけではなく、その背後にある研究開発といった側面をも描きながら、それぞれの仕事の意義を浮かび上がらせることを目的とするものである。したがって、発掘調査を題材とする、この教材のシナリオ作成に当たっても、発掘や整理といった現場作業を取り上げるだけでなく、その背後にある、学芸員の調査研究といった姿をも描くことが一つのポイントとなる。

さきたま資料館では、設立以来、全体で9基の古墳をもつ、さきたま古墳群の整備を兼ねた発掘調査を進めているが、今回の撮影対象となるのは、平成7年度に行われる將軍山古墳の発掘作業である。いうまでもなく、古墳の発掘作業は、その計画から発掘を経て、調査報告の完成に至るまで、長い期間を要する、スケールの大きなプロジェクトである。したがって、単なる作業の技術面だけではなく、発掘調査の意義をも浮かび上がらせようとするれば、なんらかの形で、長期間に亘る、その作業の流れを30分の映像にまとめるための工夫が必要となってくる。また、既に、作業の終わってしまった、過去の出来事を、どう映像化するかも、重要な課題の一つとなってくるであろう。

上のようなことを前提に、シナリオ化に当たっては、実際の発掘作業の描写に入る前に、特に、以下の三シーンを設置することとした。

シーン1. 我が国有数の大型古墳群である〈さきたま古墳群〉の紹介

シーン2. 〈さきたま古墳群〉に隣接する〈さきたま資料館〉の役割の紹介

シーン3. 今日に至る発掘調査の経緯とその成果の紹介

実際の発掘画面の前に、上のような三シーンを設定することで、〈さきたま古墳群〉での発掘の目的や作業経過を明らかにし、発掘のバックボーンとなっている、調査研究の実態や、また、そこに携わる考古学系の博物館学芸員の存在をも浮かび上がらせようというのが、その主な“ねらい”である。

以後に出てくる発掘調査や、発掘遺物などの処理の場面は、純粹に、技術紹介が主となるシーンであるが、前記の3シーンによって、あらかじめ、その発掘の背景が説明されているので、技術場面の一つ一つは、単なる技術紹介を越えた、意味をもった、説得力のある画面として生きてくるものと考えられる。

発掘調査の計画から、その成果のまとめまでを映像化する、この教材では、長期間にわたる多量で、多種多様な内容を、ほぼ、30分という時間枠に収めることが要求される。したがって、シナリオ化に当たっては、この大量の情報を、どのような手法によって、テーマに沿った、まとまりのある教材としていくかが、一つのポイントとなる。

この種の作品では、オーソドックスな、ナレーションによる展開手法が取り入れられることが多い。しかし、この度の教材の対象者が、主として、これから考古学系学芸員の仕事を学ぼうとする、学生などの初心者であることを考えると、淡々とした情報の提供だけでなく、その提示の方法を、より魅力のあるものにして、学習者の興味関心を、少しでも教材の内容に引きつけるための工夫が必要ではないかと考える。このような観点から、本編では、画面を進める方法として、一人のリポーターを登場させることとした。レポートを担当したのは、センター側のプロジェクトメンバーである須藤護助教授だが、同助教授の専門は民俗学であり、考古学は、いわば門外漢である。このような研究者が、発掘の計画から終了までの過程を、いわば、

学習者の代表として、彼等と同じ目線で観察し、レポートしていくことで、この教材を、一般的な解説型の教材とは異なった、分かり易い、説得力のあるものにすることが出来るのではないか、また、学習者の興味をより引き付けることの出来る、魅力のあるものとする事が出来るのではないかというのが、その“ねらい”である。

放送番組の講座などで、講師が、自分の専門領域について講義するのは、きわめて一般的なことである。しかし、このように、ある研究者が、自分の調査研究の手法を駆使して、専門外のテーマをレポートしたとしたら、どのようなことが起きるのか？…そこには、この度の教材制作だけではなく、これからの教材制作の手法をめぐる、新たな課題が内在しているようにも思われる。今後の評価調査の結果なども踏まえて、継続的に、研究していくべき課題ともなるのではないだろうか。

(2) 『収集資料の整理と保管』

○主題

博物館では、考古資料をどのように収集し、それを整理し、保管しているかを描きながら、考古学研究の基礎ともなる、資料の整理・保管の仕事のポイントを、具体的に浮かび上がらせる。

○シナリオ案・骨子

①プロローグ

②考古資料の収集

- ・博物館における考古資料の種類と収集法

③資料の整理

- ・受け入れた資料のクリーニング—補修—実測—判定—ラベリング—ファイル化の過程

④考古資料の保管

- ・収蔵施設と設備

⑤エピローグ

収集資料の整理・保管のようすは、「発掘調査」の教材でも扱われる。しかし、「発掘調査」の場合、取り上げられるのは、あくまでも、発掘の一連の流れの最終の部分であるが、本編では、収集資料が博物館に入ってきた後の、整理・保管の作業を主体的に描くことになる。

この整理・保管の作業も、各博物館の事情によって、その内容が微妙に異なるが、本編では、モデルとなる埼玉県立博物館に取材して、その事例に即しながら、映像化を進めることとした。構成に当たっては、整理→保管の流れを、出来るだけ忠実に追いながら、特に、その技術面が、学習者に、出来るだけ具体的に伝わるようにと努めたが、プロジェクトの研究会での、“この教材では、コンピュータなども導入した、近代的な整理・保管の側面なども紹介すべきではないか…”という意見を受けて、特に、考古資料関連のデータのコンピュータ処理の部分などに、

力点の一つを置くこととした。

手法については、技術紹介の部分が多く、いわゆる、教材的な内容の意味が強い作品なので、オーソドックスな、ナレーションによる解説の手法を取り入れることとした。しかし、構成に当たっては、単に、情報を羅列するだけではなく、全体のストーリーを、新しく収蔵することになった、ある一つの狂言回しともいべき資料が、整理・保管されていく過程を追うという形にして、学習者に、内容を、より有機的な繋がりの中で、出来るだけ統一的なイメージをもって把握してもらえようと工夫した。

研究会での企画会議の、最初の段階からの検討事項にもあったように、この度のシリーズでは、博物館学芸員の仕事の基調となっている、調査研究の部分を、いかに描いていくかが大きな課題の一つとなっている。本編は、技術の紹介が主流となっている教材なので、そこに、どのような形で調査研究のようすを組み込んでいくかは、シナリオ作成に当たってのポイントの一つであった。そこで、調査研究の実際を、具体的に映像化する一つの方法として、特に、資料の判定のシーンを設け、ここでの議論のようすを詳しく描いてみることにした。こうした設定の中でなら、学芸員の調査研究活動の側面が、ごく自然なストーリー展開の中で描けるのではないかというのが、その“ねらい”である。

勿論、シナリオで、このようなシーンの設定をしたが、この部分を、最終的に、いかに自然で、説得力のある画面として構成出来るかどうかは、演出の段階での、処理の仕方いかんにかかわるところが多い。シナリオでの、こうしたシーンの設定の是非についても、本編の完成後の検討課題の一つとしていきたい。

(3) 『企画展示』

○主題

ある企画展示が計画され、諸準備の作業を経て、完成するまでの流れを描きながら、展示とは、そこに携わる学芸員達の日頃の研究の成果にほかならないのだということを浮かび上がらせる。

○シナリオ骨子

- ①プロローグ
 - ・内覧会の会場で
- ②展示企画の開発
 - ・埼玉県立博物館の考古資料部門における研究体制
- ③展示企画の計画と準備
 - ・企画立案—調査—展示計画の立案と準備
- ④展示作業の実際
 - ・展示物の搬入から展示作業の終了まで
- ⑤エピローグ

この教材では、企画展示の一つの事例として、丁度、教材の作成時に作業が進行中であった、埼玉県立博物館の特別展「古代東国の渡来文化」を取り上げることとした。勿論、進行中の作業を取材するとはいっても、企画の準備そのものは、既に、数年をかけて進んでいて、ポイントとなる映像素材の中には、現時点で、撮影不可能となったものも少なくない。また、これから行われる作業を描くにしても、その内容は、実に多岐に亙ったものであり、その全てを取材することは、時間的にも、また、費用的にも到底不可能なことである。

シナリオ作成に当たっては、上のような条件を考え合わせながら、まず、30分の時間枠の中に、どの内容を盛り込めば、主題をより明確に現わせるかという、素材の選択を中心にして作業を進めることとした。

企画展示の流れを描くにしても、ただ、起こった事実を記録して、羅列するだけでは、説得力のある教材とならないことはいままでもない。したがって、構成に当たっては、まず、この度の企画展示が、どのような背景から、どのような目的をもって生まれてきたのかを描くために、取材する埼玉県立博物館の研究体制を取り上げることとした。そして、このセクションの中で、大前提である、この度の企画展示の位置付けを明確にした上で、実際の展示の企画や準備の作業の描写に移ることとした。学芸員の仕事の意味を理解してもらうための教材としては、いきなり作業の紹介に入るよりは、時間がかかるにしても、こうした内容も、不可欠な要素ではないかと考える。

構成の方法については、起こったことを、出来るだけ事実に即して描くドキュメンタリーの手法を取り入れることとした。しかし、取材した素材を、ただ、時系列に沿って羅列する一般的な方法は避け、画面に、出来るだけまとまりのあるストーリー性をもたせるため、主人公を、担当である男女の学芸員に絞り、出来るだけ彼等の行動を中心に追いながら、主題を追求していく方法を取ることにした。また、主人公の活動以外の部分の描き方についても、ナレーションによる解説を出来るだけ少なくし、インタビューを中心に構成して、当事者に、その意見や起こったことを、生の声で語らせることで、事実のもつ迫力が、出来るだけ説得力をもって伝わるようにと工夫した。起こったことを、事実そのままに描くとしても、既に、作業の完了してしまったものについては、当然、取材は不可能である。そこで、こうした、過去の出来事については、主に、インタビューや資料、写真などによって描くこととしたが、特に、実際の作業画面を見なければ、なかなか理解し難いような一部の場面（調査、資料の出陳交渉、資料の借用、搬入等…）については、既に終了している作業を、もう一度、演じてもらう再現手法を取ることにした。いわゆる、“やらせ”については、いろいろと議論のあるところであるが、このような教材の場合には、必要な手法ではないかとも考える。事実、その作業を日常的に行っている人が、自分の仕事を再現する限りは、多くの場合、ごく自然で、説得力のある画面を得ることが出来る。こうした、ドキュメンタリーの手法面についても、このシリーズの教材の一つの課題としていくことが出来るだろう。

以上のシナリオは、合計6本のシリーズのうち、平成7年度に制作された3本に当たるものであり、以下は、平成8年度に制作された、シリーズ後半の3本である。これらのシナリオの

構成に当たっては、新たに研究会を行い、平成7年度の経験を踏まえて、十二分な検討を行って後に、作成にとりかかった。

(4) 『常設展示』

○主題

考古学系の常設展示における学芸員の仕事を、長野県立歴史館の事例を中心にしながら、博物館のメインテーマ（基本理念）にかかわる常設展示の仕事の意味合いを浮かび上がらせる。

○シナリオ案・骨子

- ①プロローグ—空から見た長野の景観—
- ②長野県立歴史館の概要
- ③常設展示制作の経緯
- ④常設展示の内容
- ⑤「小テーマ展示」
- ⑥エピローグ

「常設展示」については、企画の当初、各地の博物館に取材して、同じ考古学をテーマとする各種各様の展示の在り方を紹介しながら、そこに共通する常設展示の意味合いを浮かび上がらせていく…といった方向で検討が進められていた。しかし、平成7年度の3本の教材を完成させた後の研究会で、総花的な、この方法では、展示の種々層は描けたとしても、果たして、このシリーズの目的である、学芸員の仕事を浮かび上がらせられるのだろうかといった疑問が生まれてきた。そして、再度、検討の結果、取材先を一つの博物館に絞り、その常設展示に関わる学芸員の仕事を深く描いていく…という方針が確認され、その対象として、現時点で、最も斬新な展示方法を取り入れていると考えられる長野県立歴史館が選ばれた。

長野県立歴史館は、平成6年11月に開設された、埋蔵文化財資料や古文書などの収集・管理、調査研究などを行うとともに、展示や閲覧なども行う多機能型の歴史博物館である。

その常設展示のコーナーでは、原始・古代から近現代に至る、長野県内の文化財を扱っているが、この教材では、その中の考古学関連の部分の成り立ちや、そこに关わる学芸員の仕事を取り上げることとした。

シナリオの構成に当たっては、まず、歴史館の地理的な位置付けを明確にしておくという意味合いから、導入を、航空撮影から入ることとした。こうした部分を表現する場合、図面などで済まされることが多い。しかし、この教材は、博物館のメインテーマを表現する常設展示を取り上げるものであり、そのためには、冒頭で、多くの考古資料が発掘された長野県独自の地勢を印象づけたり、地上からは不明確な、博物館と隣接する森將軍塚古墳の位置関係などを鳥瞰したりしておくことが、続くシーンを分かりやすく展開するためにも不可欠であると考えら

れた。シナリオでは、以後、展示ばかりでなく、埋蔵文化財や古文書の収集・管理や調査研究といった機能をも兼ね備えた歴史館の概要…体感型で動的な常設展示が制作されていったいきさつ…信濃の風土と歴史をテーマとする常設展示の内容…などの紹介が続き、最後に、常設展示の展示替えの作業に携わる学芸員の仕事をフォローしながら、全体の流れを通して、歴史館の常設展示の特徴と学芸員の仕事とを浮かび上がらせることを“ねらい”としている。

構成の手法としては、基本的に、関係者にインタビューして、その話の内容を映像化するドキュメンタリーの方法を取ることとした。常設展示の制作過程などの過去の出来事については、写真や資料などの静止画に頼らざるを得ないし、展示替えの作業については、既に、準備作業の一部が終了しており、再現ということになる。しかし、いずれの場合も、実際に、それを担当した当事者が登場し、語ったり演じたりすることとなるので、単に、ナレーションによってストーリーを進めるよりは、遥かに、リアリティーや迫力を増すことが出来るものと考えた。また、編中には、展示内容の紹介のシーンがあり、普通、こうした場合、オーソドックスなナレーション手法が取られることが多いが、この部分についても、全体のドキュメンタリーなタッチを維持するため、見学者が、学芸員の案内によって展示コーナーを回るという場面を設定し、展示に携わる学芸員が、自らの声で解説を展開するという手法を取ることとした。

教材の場合、このように、ドキュメンタリーなタッチにこだわった展開が良いのか、あるいは、きちんと整理された形の、客観的なナレーションにすべきなのかは議論の分かれるところであり、この点も、完成後の評価の課題の一つとすることが出来るであろう。

(5) 『体験学習』

○主題

展示や調査研究活動などと併せて、博物館の重要な仕事の一つとなっている教育普及活動における学芸員の仕事を、考古学分野の体験学習を中心に描きながら、博物館における社会教育の意義を浮かび上がらせる。

○シナリオ案・骨子

- ①プロローグー加曾利貝塚博物館の概要ー
- ②「土器づくり」の目的と意義ー「体験学習」発足の経緯ー
- ③「土器づくり」の準備ー学芸員の役割ー
- ④「土器づくり」の実際ー《土ねり》から《調理》までー
- ⑤エピローグー「土器づくり」・今後の課題

この教材の場合も、当初は、単に「体験学習」だけではなく、各種の講演会や史跡見学会なども含めた教育普及活動の全体像を描くことを意図していた。しかし、平成8年度に入ってから、研究会で、軌道修正が行われ、主題を「体験学習」のみに絞り、これを詳しく描くことの中から、教育普及活動の意義と、そこで学芸員が果たす役割とを浮かび上がらせることとなった。

II. 学部教育教材「博物館学芸員の仕事（考古編）」の制作

普通、「土器づくり」といった主題の場合、その技術面だけを取り上げた、技術指導教材といった体裁の作品になりがちである。しかし、博物館学芸員の教育普及活動といった側面を主題とするこの教材では、単なる技術指導を越えた内容をもたなければならないことはいままでもない。したがって、シナリオ化に当たっても、「土器づくり」の内容に入る前に、まず、当時の関係者に登場してもらい、「体験学習」の発足の経緯を語ってもらったり、「土器づくり」に入る準備段階での学芸員の役割のシーンを加えることで、教育普及活動の意義や、それに携わる学芸員の役割等が浮かび上がるようにと工夫した。また、「土器づくり」の実際を紹介する段階に入っても、当初の下調べの時点では、撮影を効率的に進める意味合いから、二日間にわたる作業を、いわゆる“やらせ”によって、一日で終了させてしまう予定であったところを、やはり、現実の進行通りに、二日間で取材するなどして、単なる技術指導教材から脱するための工夫を加えた。「土器づくり」の工程だけに焦点を絞る技術指導教材であれば、取材の作業を、いかようにも短縮し、合理化することが可能である。しかし、この教材では、「土器づくり」の工程もさることながら、それにかかわる学芸員や学習者の、学習の進行につれての変化のようすを描くことも大きなポイントの一つである。したがって、そのためには、「土器づくり」以外の「体験学習」のようすをも省略せずに描くことが、博物館の教育普及活動を題材とする教材としては、必要ではないかと考えた結果である。

こうした題材だけに、手法としては、学習の過程を、余計な手を加えずに、忠実に追っていくドキュメンタリーな方法が主体となる。シーン②、③の「土器づくり」の目的や意義、そして、学芸員の準備のようすを描く部分については、インタビューや再現の手法を使うこととしたが、「土器づくり」の実際を描く場面については、前述したように極力、“やらせ”を排して、起こったことをありのままにとらえていく、完全なドキュメンタリー手法を目指すこととした。勿論、その際には、単に「土器づくり」の技術面ばかりでなく、学芸員や学習者の動きなども過不足なく描けるようにと、シナリオの設定の上でも工夫することとした。

こうした、完全なドキュメンタリーでは、シナリオに、どこまで設定を書き込んでおくかは、いつの場合も、一つの課題となる。この教材の場合のシナリオの方法が適当であったかどうかといったことについても、作品完成後の研究テーマの一つとすることが出来るであろう。

(6) 『資料の分析と保存処理』

○主題

考古系の博物館学芸員が、基礎知識として身につけておくべき、遺跡や遺物の最新の保存科学的処理方法などについて、国立奈良文化財研究所の事例を中心に描いていく。

○シナリオ案・骨子

- ①プロローグ
- ②発掘資料の分析
- ③発掘資料の保存処理(1)―無機質遺物の場合―

- ④発掘資料の保存処理(2)―有機質遺物の場合―
- ⑤保存処理された資料の活用
- ⑥エピローグ

これまでの5編と異なり、この教材は、学芸員の仕事を、直接、取り上げるものでなく、学芸員を目指す人達に必要とされる、考古資料の自然科学的な分析や保存処理について描こうとするものである。

他の教材では、どの場合も、いわば、学芸員が仕事をする姿が一つの核となって、シナリオが構成されたが、この教材では、自然科学的な分析や保存処理の方法そのものが中心に置かれることになる。したがって、シナリオの作成に当たっても、科学教材を作る場合と同じような、正確な知識に基づいた内容と、それを論理的に展開する構成とが要求されることになる。そこで、シナリオ化に当たっては、数回の現地調査を行い、また、関連の文献資料などにも目を通した上で、まず、準備稿を作った。そして、それを、担当の研究者にチェックしてもらいながら、何回かのフィードバックを経て、完成稿にまとめていくという方法をとることとした。

構成の手法については、当然のことながら、画面をナレーションによって繋いでいく、オーソドックスな解説型の教材スタイルをとることとした。先行きの展開が不明瞭な、ドキュメンタリーなスタイルの教材と異なって、解説型の教材の場合には、そのナレーションも、内容に見合った厳密さが要求されることになる。したがって、ナレーションについても、シナリオの段階で、出来るだけ、完成度の高いものに仕上げておくようにと努めた。また、この教材の場合、外面的な作業からでは理解のし難い、化学的な現象の解説場面がポイントとなることが多いので、適宜、イラストを挿入するなどして、抽象的な内容を、分かり易く映像化するようにと工夫してみた。

勿論、このような科学教材的な作品であっても、この度のような解説型の教材スタイルが唯一の方法でないことはいうまでもない。今回のシナリオのスタイルの良否についても、作品完成後の評価の段階での検討事項としていければと考える。

以上、今シリーズの各シナリオの、基本的な“ねらい”について記した。当然のことながら、シナリオは、あくまでも、完成品の設計図であり、ここで設定したことが、最終の段階で変更されるようなことも少なくはない。例えば、長野県立歴史館を取り上げた「常設展示」の場合、冒頭の《長野県立歴史館の概要》を紹介するシーンで、歴史館の特長を強調する意味合いから、館内の施設を、ある程度の時間をかけて手厚く描くことにしてあった。しかし、撮影後のラッシュ試写で、こうしたシーンが、一般的な学芸員に向けた教材としては、歴史館の紹介に偏り過ぎてはいないかということになり、シナリオの、この部分を、より教材の目的に沿った常設展示についての一般的な説明シーンにと再構成した。勿論、このシナリオは、研究会のメンバーのチェックを経て完成したものであったが、シナリオの文字面で見たと、それを、実際に映像化した画面との印象の相違が、このような事態を招いたものであった。

では、このように、変更されることも多いシナリオは、どこまで詳しく、書き込まれるべきなのだろうか？ 一般的に、何が起きるか予測の出来ないドキュメンタリーなどでは、シナリオというよりは、簡単なプロトコルを用意しただけで、撮影に入ることが多い。この場合、必

II. 学部教育教材「博物館学芸員の仕事（考古編）」の制作

要な教材を集めた後の、編集の段階こそが、制作のポイントであるといった考え方に立つものであろう。しかし、本シリーズでは、6本中5本までがドキュメンタリーなスタイルの教材であるが、そのいずれについても、出来る限り、詳しいシナリオを作成することとした。勿論、ドキュメンタリーな教材のシナリオでは、完成品を彷彿とさせるような、詳しい画面やナレーションを描くことは不可能である。また、もし、そのようなシナリオがあったとすれば、却って、その内容に拘束されて、自由な取材が妨げられるといったことにもなりかねないだろう。しかし、きちんとした下調査を経て、そこで得た素材を、明確な目的意識のもとに、有機的に配列して、シナリオの形にまとめていくことは、例えそれが、どんなスタイルの映像であっても、必ず、必要となる作業なのではないだろうか。そして、そのようなシナリオは、特に教材の場合、あらかじめ、その目的をしっかりと固めて置く意味からも、詳しくれば詳しいほど有効ではないかと考える。勿論、こうしたシナリオは、いくら完全に出来たとしても、撮影や編集の段階で、何回も変更を余儀なくされる場合が多いことは事実である。しかし、一見、無駄に見えるような、綿密なシナリオの制作段階があってこそ、初めて、完成度の高い、教材性に溢れた作品が出来上がるのではないかと…というのが、本シリーズのシナリオ作成に臨んだ、基本的なスタンスである。

4. 取 材

(スケジュール)

「発掘調査」：第一次ロケ・平成7年9月25日（水）～28日（木）	さきたま資料館
第二次ロケ・平成7年11月9日（木）～10日（金）	〃
第三次ロケ・平成7年11月13日（月）	〃
第四次ロケ・平成7年12月5日（火）～6日（水）	〃

「資料の整理と保管」	
： ロケ・平成7年11月24日（金）～26日（日）	埼玉県立博物館

「企画展示」：第一次ロケ・平成7年10月16日（月）	埼玉県立博物館
第二次ロケ・平成7年10月18日（水）～19日（木）	〃
第三次ロケ・平成7年11月23日（月）	〃
第四次ロケ・平成7年11月21日（火）～22日（水）	〃
第五次ロケ・平成7年11月24日（金）	〃

「常設展示」：第一次ロケ・平成8年10月5日（土）	空撮（松本空港）
第二次ロケ・平成8年11月17日（日）～18日（月）	長野県立歴史館
第三次ロケ・平成8年11月26日（火）～30日（土）	〃

「体験学習」：第一次ロケ・平成8年8月31日（土）	加曾利貝塚博物館

：第二次ロケ・平成8年9月7日（土）	〃
：第三次ロケ・平成8年9月14日（土）	〃
：第四次ロケ・平成8年9月28日（土）～29日（日）	〃

「資料の分析と保存処理」	
：第一次ロケ・平成8年12月9日（月）～14日（土）	奈良国立文化財
：第二次ロケ・平成9年1月8日（水）～10日（金）	〃 研究所

（撮影・演出のポイント）

撮影には、1/2インチ・ベータカムカメラを使用し、スタッフは、基本的に《演出・同助手・カメラ・ビデオエンジニア・照明・制作進行》の6名で当たることとした。今回のシリーズには、取り直しの効かないドキュメンタリーな素材が少なくはなかったが、この教材の場合、取材の対象が、同一の場所の、比較的狭い範囲に限られていたこともあり、敢えて、複数のカメラを避け、全てを、一台のカメラで取材することとした。複数のカメラで取材を行えば、数多くの、多種多様な素材が得られることは確実である。しかし、その分量だけ、教材の“ねらい”に沿った素材が得られるかということ、スタッフが増加した分だけ、意思統一が希薄となって、結局は、目的の不明瞭な情報ばかりが、いたずらに増えてしまう…といったことになるケースも少なくはない。したがって、この度の取材では、制作費用の問題もあり、終始、1カメラ・1スタッフという体制で作業を行うこととした。但し、この教材の場合、素材の性格上、撮影が長期間にわたることになるが、スタッフは、出来る限り、同一のメンバーで固定化するようにして、教材の統一した“ねらい”が、取材活動の中にも着実に浸透出来るような体制をとることとした。

各教材の、撮影や演出面での留意点を示せば、以下の通りである。

(1) 『発掘調査』

この教材は、基本的に、数カ月にわたる実際の発掘の経過をドキュメントするものである。したがって、取材は、全体の流れが理解出来るように、発掘期間の中の初期・中期・後期の各一回と、発掘の成果がある程度見えてきた最終段階の一回の、合計四回で行うこととした。これで、長期間にわたる発掘の全貌が描けるかどうか…といった点が懸念されたが、実際の撮影日の特定に当たっては、先方と、絶えず密接に連絡をとり、その内容が、教材として最適な日時を選ぶようにしたので、シナリオの“ねらい”を、ほぼ満たし得る素材を得ることが出来た。

撮影面では、発掘現場が平地で、現場周辺を一望出来るようなポジションがなかったため、どのようにして、その全体像をとらえるかがポイントとなった。そして、現場の全貌をとらえることは、教材として不可欠であるという判断から、一日だけ、ミニクレーンを使用して、鳥瞰撮影を行うこととした。

演出面では、インタビューの場面の処理が、大きなポイントの一つとなった。インタビューは、勿論、セリフなどを定めず、簡単な質問事項だけを設定して、ぶっつけ本番で行ったもの

であるが、インタビュアーが素人であり、また、質問の受け手のほうにも、人によって上手下手があったりで、必ずしも、シナリオの“ねらい”のように、会話がスムーズに展開しなかったようなケースも少なくなかった。こうしたインタビュー取材の場合、綿密な練習をしたり、テストを重ねる程に、演者の自然な持ち味が損なわれていく場合も多く、どのような設定で演出をすべきかは、今後の研究課題の一つとなる。

(2) 『資料の整理と保管』

この教材は、埼玉県立博物館で、(3)の「企画展示」の取材と同時並行で行ったが、取材現場が、いずれも博物館内に限られており、また、館側で綿密な準備体制を設定して戴いたこともあり、わずか二日という短い期間内で、効率的な撮影を終了させることが出来た。

取材が、シナリオの設定通りに進行したので、演出面では、大きな問題はなかった。ただ、強いて上げれば、資料のクリーニング、補修、計測…といった、一連の技術的な作業がいずれも長時間を要するものであり、これらの動きのどこを捉えれば、短時間に要領よく、そのポイントを紹介出来るかといった、画面構成の上で、検討を要する点が少なくなかった。また、調査研究面の紹介をするために取り上げた「資料の判定」の場面は、この撮影のために、特に仕組んだ“やらせ”のシーンであるが、こうした方法で、学芸員のバックボーンである調査研究の仕事の重要さを、適切に表現出来たかどうか…といった点についても、まだ、多くの検討課題が残されているように思われる。

(3) 『企画展示』

この教材は、特別展《古代東国の渡来文化》の準備から完成までを、ほぼ、手を加えずに、進行に沿って、そのまま捉えていくという完全なドキュメンタリータッチの教材である。したがって、取材のスケジュールを、その都度、実際の展示制作の展開に合わせて進めなければならなかったため、ロケーションも合計で5回を重ねることとなった。

このような取材の場合、常に留意しなければならないのは、当然のことながら、取材対象の側の作業を妨げないということである。特に、今回の場合、貴重な文化財を取り扱う作業が多く、もしも、取材が原因で事故が起きたり、また、スケジュールに支障が起きたりしては取り返しのつかないことになる。そのため、展示作業の場面の撮影に当たっては、どんな場合にも、演出を加えず、ドキュメンタリーに徹するという原則を立て、これを厳守することとした。したがって、期日が切迫して、修羅場状態となった展示の作業現場などでは、撮影前の打合わせで、演出の“ねらい”を確認しあった後は、カメラマンが独自の判断で取材するといった場面が多くなった。

再三、記してきたように、この「企画展示」の中でも、学芸員の調査研究の面の活動を浮かび上がらせることが、一つの課題となっている。そして、それを、展示企画の計画や準備のシーンで描くようにと、シナリオ上では設定した。しかし、実際は、それらの作業のほとんどは、既に、数カ月前に終了したものばかりであり、映像化するには、資料や再現という方法を取らざるを得なかった。過去の出来事を映像に収めるには、ある程度、やむを得ないこととはいえ、学芸員の調査研究の大切さを、より印象づけるには、資料や再現による画面構成以外に、もっ

と、適切な映像化の手法がなかったものかどうか？…これも、今後の研究課題としていきたい項目の一つである。

(4) 『常設展示』

この教材は、その内容が、歴史館の概要―常設展示制作の経緯―展示内容の紹介―展示替えの作業というように多岐に亙るため、取材の形式も、インタビューと資料による過去の回想、純粋なドキュメンタリー、演出を加えた再現…というように多彩なものとなった。

撮影上の問題点は、特になかったが、導入の博物館の施設や設備の紹介の部分で、対象が、ほとんど静的なものであったので、移動車を多用して、画面に、動的な流れを出すようにと表現上の工夫をしてみた。

演出面では、この教材でも、学芸員の調査研究といった側面をどのように表現するかが、一つの課題となった。シナリオ上では、この部分を、主として展示替えの計画の過程を描くことで表わそうとしたが、取材を始めてみると、こうしたシーンのほとんどは、インタビュー・過去の資料・演出による再現…などの手法に頼らざるを得ず、学習者が納得出来るような、リアリティーのある自然な画面となったかどうかについては、まだ課題が残るところである。特に、「常設展示」については、これにかかわる学芸員の仕事の、どの部分を切り取って描けば適切なのかといった点が、また不明確であり、シナリオの段階で、これらについても、もっと検討しておくべきではなかったかと反省される。また、展示内容の紹介のシーンについては、学芸員と観客に扮する演者を、あらかじめ用意して、全てを、演出によって展開する手法を取ったが、この部分についても、自然な流れの中で、学習者に展示の趣旨を理解してもらおうという、当初の意図が実現出来たかどうか？…今後の評価の項目に加えて、検討してみたい課題の一つである。

(5) 『体験学習』

この教材は、毎週土曜日、合計4回にわたって行われる実際の「体験学習」に密着して、その全てを、ありのままに描く、完全なドキュメンタリースタイルの作品である。しかし、勿論、作為は加えないものの、これを教材として成立させるには、単なるニュース撮りではなく、取材の過程の中で、さまざまな工夫を凝らすことが必要となってくる。前述したように、例えば、初め、「体験学習」の三日目の、成形した土器の表面を磨くといった作業は、きわめて簡単なものなので、二日目の成形の作業の後に、手元の動きを接写することでも十分な画面を得ることが出来ると考えていた。しかし、単なる技法紹介ではなく、「体験学習」そのものの教材であるという観点に立つと、手元の接写ばかりでなく、そこにかかわる学芸員や学習者たちのリアルな反応を描くことは不可欠であり、また、この日の午後に行われる学習者の博物館内外の見学会も、「体験学習」の社会教育としての一面を紹介するためには、是非、紹介しておきたい素材なので、三日目のスケジュールも、是非、取材しようということとなった。また、単に、土器づくりの経過を追うだけではなく、加曾利貝塚博物館の特性や、土器づくりの目的や意義についても描く必要があり、これについても、「体験学習」の創設期の関係者へのインタビューや諸資料なども加えての取材を行うこととなった。

II. 学部教育教材「博物館学芸員の仕事（考古編）」の制作

撮影については、土器づくりそのものが、きわめて限られた場所で行われ、その作業も、特に、シャッターチャンスが難しいようなものではなかったもので、じっくりと、計算しながらの絵づくりが出来た。また、演出についても同様で、あらかじめ、作業の流れや被写体の動きが予測出来たので、“ねらい”の画面を、ほぼ過不足なくとらえることが出来た。但し、この土器づくりの取材の中で、当初からの課題である、学芸員の仕事のポイントを、どこまでの確に描けたかどうかについては、シナリオの構成方法もふくめて、まだ、いくつかの課題が残されているようにも考える。

(6) 『資料の分析と保存処理』

この教材の取材対象となっている《分析や保存処理》の諸作業は、奈良国立文化財研究所では、それぞれ、一定のローテーションのもとに行われているもので、シナリオ上で予定した作業の全てが、常に、同時に行われているわけではない。したがって、取材に当たっては、そのほとんどを、再現映像で構成することとし、先方の都合のよい日時に作業の準備をしてもらい、それに合わせて、5日間という短期間で、全てを集中的にカメラに収めるという方法をとった。そして、研究所外の作業である、保存処理の完成した資料の活用場面等については、別途、実際のスケジュールにタイミングを合わせて、ドキュメンタリー手法で取材を行うこととした。

撮影については、準備が万全に行われていたこともあり、かなりな量の取材内容であったが、全てを、予定内で撮りきることが出来た。また、演出面についても、企画の段階で調査を深め、かなり実情に近い、詳しいシナリオを完成させていたので、現場では戸惑うことなく、比較的、スムーズに作業を進めることが出来た。しかし、必要な画面は、一応過不足なく取材出来たが、《分析や保存処理》といった作業のポイントは、肝心の部分が、いずれも、映像化しにくい化学現象によって支えられているものである。初心者にも、《分析や保存処理》の説明に不可欠な化学現象を理解してもらうために、取材した画像だけで十分であったかどうか？…教材完成後の評価の結果も見ながら、検討されなければならないところであろう。

以上、考古シリーズ6本の教材の経過について記した。各編の報告の中でも記したように、今回の取材は、撮影場所も、また、取材内容も多岐に分かれ、スケジュールも長期に亘ったにもかかわらず、全体としては、比較的スムーズに進行した。そこには、いろいろな要因が上げられるが、最も大きかったのは、なんといっても、取材対象の博物館側の全面的な協力が得られたことではないかと考える。

どんなに優れた企画であっても、取材側の協力が得られなければ、優れた成果に結び付けることは出来ない。そして、そのためには、取材側が何をしたいのかという、制作の“ねらい”を、的確に、具体的に記した企画書を用意することも大切な要素の一つではないだろうか？ その点、今回の場合、研究会で練り上げた企画書の趣旨が、どこでも、よく理解され、十分な協力を得られたことは幸いであった。

5. 仕上げ

(編集)

・「発掘調査」	平成8年1月23日(火)～24日(水)	制作棟編集室
・「資料の整理と保管」	平成8年2月19日(月)、21日(水)	〃
・「企画展示」	平成8年2月13日(火)、16日(金)	〃
・「常設展示」	平成8年2月12日(水)～13日(木)	〃
	平成9年5月21日(水) ※改訂版	〃
・「体験学習」	平成9年2月4日(火)、5日(水)	〃
	平成9年5月21日(水) ※改訂版	〃
・「資料の分析と保存処理」	平成9年3月5日(水)、6日(木)	〃
	平成9年5月31日(水) ※改訂版	〃

当センターの本編集は、D-3によるデジタルな編集システムで行われる。したがって、編集作業は、まず、アナログなベータカム・テープでプリ編集を行い、それにもとづいて、デジタルなD-3のシステムで本編集を行うという段取りとなる。

編集に当たって、留意したのは、第一に、教材の内容を、いかに分かり易く、的確に伝えるかということである。そこで、編集では、ビデオエフェクトなどを駆使した画面展開の面白さよりも、むしろ、教材性を重視して、取材した実写画面に、スーパーインポーズなどの文字やイラストなどの作画を組合わせて、教材として伝達すべきことが、出来るだけ画面の上に表現されるようにと工夫した。

スーパーインポーズについては、基本的に、人名や地名、施設名などの画面の全てに付けることを原則としたが、その他、特に会話などの場面で聞き取りにくい言葉が出てきたような場合には、多少、画面の流れが損なわれても、分かり易さを優先して付け加えることとした。

イラストは、ほとんど、ボードによる静止画で処理した。しかし、現時点で振り返ると、いわゆるアニメーションによる動画像のほうが、教材の表現としては適切ではなかったか…と反省される箇所もいくつかある。例えば、先述したように、「資料の分析と保存処理」の教材では、金属の脱塩処理や、木材の真空乾燥処理のような化学的な処理法がポイントとなっているが、この部分は、全て、簡略な図解と科学式のような文字のボードで済ませることとした。しかし、教材で学習する側に、特に、化学についての専門的な知識があるならばともかく、その他の一般の学生にとって、こうした画面だけで要点を理解するのは、かなり困難なことであろう。アニメーションによる動画を含めて、こうした抽象的な現象を、どう画像化していくかは、今後も、継続的に研究していかななくてはならない課題となるだろう。

(録音)

・「発掘調査」	平成8年3月6日(水)	制作棟・RAスタジオ
・「資料の整理と保管」	平成8年3月5日(火)	〃

II. 学部教育教材「博物館学芸員の仕事（考古編）」の制作

・「企画展示」	平成8年3月6日（水）	〃
・「常設展示」	平成9年3月14日（木）	〃
・「体験学習」	平成9年3月14日（金）	〃
・「資料の分析と保存処理」	平成9年3月13日（木）	〃

録音に当たっては、センター内でナレーションを録り、それに、外部の録音スタジオで音楽・効果をミックスして音響原版を作り、それをもとにセンターのスタジオで、D-3による、最終的な完成原版を作成するという方式をとった。センターでは、放送番組の録音が主体で、MA(マルチオーディオ)の行われることが少ないための措置である。

この教材は、シナリオ段階からの“ねらい”で、放送番組のように講師が説明を進めるのではなく、あくまでも、客観的なナレーターを主体に全体を進行させるように構成してある。ナレーターの選択に当たっては、語り口の明瞭さを優先し、また、教材の内容を勘案して、「企画展示」と「体験学習」には、柔らかな口調の女性のナレーターを起用することとした。

映像教材である限り、出来るだけ解説を少なくして、画像そのものの力で、学習内容を学習者に提示することが理想であろう。しかし、ドキュメンタリーな画像が中心となる発掘や展示の場合とはともかく、科学的な処理法の説明が必要な、「資料の分析と保存処理」では、詳しい解説をせざるを得ない部分が多く、結果的には、ナレーション過剰の作品になってしまった。ナレーションの在り方についても、シナリオの作成方法にもからめて、今後の検討課題としていきたい。

音楽・効果については、当然なことながら、教材であることを考慮して、出来るだけ目立たない方法で処理することを原則とした。音楽については、導入とエンディング、そして、回想場面等の画面のつなぎにのみ使用することとし、また、効果についても、出来るだけ抑えぎみにして、肝心のナレーションや会話の妨げとならないように配慮した。

取材の段階で、どんなに優れた映像が得られたとしても、仕上げ段階の処理法によっては、その教材で目指したものが達成出来ないといったことも少なくはない。完成度の高い教材を目指すとするれば、編集ばかりでなく、見落とされがちなナレーションや効果音などについても、慎重な準備と処理が必要となる。このシリーズ完成後、こうした分野についても評価調査の対象として、検討を加えていくべきではないかと考える。

6. まとめ

「シナリオの作成」の項目でも記したように、同じメディア教材であっても、それは、対象や目的によって、実に多様な種類に分けられ、また、その表現方法や形式なども異なってくる。

本シリーズの教材は、先述したように、主として、これから博物館学芸員を目指そうという、学部の学生を対象として、彼等に、映像ならではの方法で、学芸員の仕事の基本を学習してもらうことを目的としたものである。このような観点から、メディアとしては、現在の学部教育で、最も導入し易いと考えられるビデオを選び、いわゆる記録映像の手法で、30分前後のストーリー性のあるビデオ教材としてまとめることとした。多くの学部での授業が、ほぼ90分程度であるとすれば、“導入”として授業の冒頭に利用するにしても、また、授業の後半に“まとめ”

として使うにしても、30分前後が適当な長さではないかと考えた結果である。

上記のような条件で教材制作を目指した場合、留意しなければならないのは、どのようなことであろうか？ 本編の場合、第一に重視したのは、出来るだけ詳しい調査に基づいた企画書を作成するということである。そして、次に、それを出来るだけ具体的なシナリオにまとめるということである。前にも記したことだが、先行きの展開が不明瞭なドキュメンタリーな素材を扱う教材の場合、ストーリーの概略を示したプロトコルのみで撮影に入ることもやむを得ないのではないかと…という考え方があつた。しかし、事前の調査さえきちんと完了していれば、撮影の方向性を指示するシナリオは、いかようにも書くことが出来るし、また、書くべきなのではないだろうか。例え、そのシナリオを、撮影の現場で軌道修正しなければならなくなったとしても、シナリオ上で、一度、きちんとしたイメージを確立しておいて、それを、現場の実情とつき合わせながら突き崩し、また、新しいイメージを創り出していくという作業は、決して、無駄なことではないと考える。同じように、本編の場合、シナリオに基づく撮影プラン（コンテ）についても、事前に、出来るだけ詳しいコンテを文書の形にしておき、それを、さらに撮影現場で、現実に合わせて、何回も再構築するという作業を繰り返した。また、同様の作業は、基本方針として、編集・録音といった仕上げの段階の作業の場でも、続けられていった。

このような作業は、当然、物を作っていく現場などでは、なんらかの形で、日常的に実行されていることであろう。しかし、教材の場合、それは、一過性のものとは異なって、何回も視聴されることを前提としているだけに、このような試行錯誤の過程を、面倒でも丁寧に繰り返していくことこそが、利用度の高い教材を形作っていく、第一のポイントなのとは言えないだろうか？

映像表現の教材性を追求していく上で、内容の正確さや、明瞭さを保っていくことは、いわば、当然のこととして、敢えて、試行錯誤といった作業の必要性といったことに重点を置きながら、制作の作業を進めていった次第である。

以上、本教材の制作の“ねらい”について記した。勿論、この度、目指したような約30分の、ストーリー型のビデオだけが、学芸員のための教材の全てとは言えないであろう。内容や長さ、メディアの形式も含めて、考えられる教材は多種多様である。今回、収録した素材は、多量に上るので、その中の技術紹介だけの部分を利用して、CD-ROM といったような双方向性の教材を開発してみるのも一つの方法であろう。また、収録素材を、分類整理して、博物館学芸員に関する、映像の資料集をまとめてみるといった方向もあるのかも知れない。

博物館学芸員養成の教材として、どのような形の教材が最もふさわしいのか？ まず当面、この度完成したこのビデオシリーズについての、綿密な評価調査を実行し、その結果をも取り込みながら、さらに、よりよい博物館学芸員養成のための教材の実現を目指していくこととしたい。